

彼女について

私が知っている

23 の事柄

すどうみやこ詩集

みやこちゃんの唄う唄ってどんな唄？

あたし 唄うとてますねん

なんてことを 呑み屋のカウンターで つぶやいたら
並びにすわったオッチャンが

へえ どんな 唄うてるんや？

フォーク？ ブルース？ カントリー？

いやいや そんなん どうでも よろしいやん

アタシの唄う唄は アタシの唄

それ以外のなんでも ありません

アタシの唄う唄は アタシの唄

なんでもかんでも 分けたがる

なんでもかんでも 色をつけなきや

わからないの？ 理解できへんのん？

ジャンル？ レッテル？ カテゴリー？

そんなん どうでも よろしいやん

アタシの唄う唄は アタシの唄

それ以上でもそれ以下でも ありません

アタシの唄う唄は アタシの唄

あたしは ただ 唄いたいだけ

あたしの唄を 唄いたいだけ

あたしが想って あたしが作った

そんな唄を 唄ってるのよ

それ以外のなんでも ありません

アタシの唄う唄は アタシの唄

アタシの唄う唄は アタシの唄

ミナミの夜

街はいつもにぎやかで
どこへいってもお祭り気分
御堂筋のバス停の前で
ゆきかう人を横目に煙草をふかす
 いちよう並木が けむりに揺れる
 ゆらりゆらゆら ミナミの夜

アーケードの下を流れる
人という名の大波小波
かきわけかきわけトロトロ歩く
あんたが待ってるいつものところまで
 グリコのネオンが 川面に揺れる
 ゆらりゆらゆら ミナミの夜

あんたにはじめて逢ったのは
千日前の裏通り
あんたの舌先三寸に乗せられて
あたしはまんまとヒッカケられた
 呑み屋の提灯が 夜風に揺れる
 ゆらりゆらゆら ミナミの夜

あれから何年たったんだろう
ずいぶんいろんなこともあったけど
ホントはなんにも変わっちゃいない
なんにも変わっちゃいないのかもね
 あたしの心も あやしく揺れる
 ゆらりゆらゆら ミナミの夜

あたしの心も ゆらゆら揺れる
ゆらりゆらゆら ミナミの夜

くたびれた天使

気がつくはずいぶん くたびれちゃったけど
これでも昔は イケてたもんよ
天使のようだねって チヤホヤされてね
ザウラあたりじゃ ならしたもんさ
背中に羽根が 生えてきたら このまま 朝まで踊ろうよ
ミナミの夜は 長くて深い ミナミの夜は あたしのもの

夢のひとつやふたつ あたしにもあったわ
どんな夢だか 忘れちゃったけど
天使の輪っかを ふきとばしたのは
ザウラあたりを 流れてた風さ
背中に羽根が 生えてきたら このまま 朝まで踊ろうよ
ミナミの夜は 長くて深い ミナミの夜は あたしのもの

ひなびた店の薄汚れた壁に
過ぎ去った想いが にじんでいるよ
天使の涙は とっくに乾いちまった ザウラあたりの古い話さ
背中に羽根が 生えてきたら このまま 朝まで踊ろうよ
ミナミの夜は 長くて深い ミナミの夜は あたしのもの

味噌汁の具

あんたと あたしは 味噌汁の具
あんたは わかめ あたしは おとうふ
ひとつ鍋の中 グツグツ煮られて
あんたはふやけて あたしは 崩れてく

あんたとあたしがいれば 他にはなにもいらない
おあげもおねぎも大根も
ひとつ鍋の中 弱火で煮られて
あんたはふやけてあたしは 崩れてく

グツグツ煮られて 弱火で煮られて
溶けあって 混じりあって 沈んでいくのよ

グツグツ煮られて 弱火で煮られて
溶けあって 混じりあって ひとつになるのよ

あんたと あたしは 味噌汁の具
あんたは わかめ あたしは おとうふ
ひとつ鍋の中 弱火で煮られて
溶けあって 混じりあって沈んでいくのよ
沈んでいくのよ 沈んでいくのよ

あんたと あたしは 味噌汁の具

鍋がグラグラ クレイジーラヴ

味噌汁の具が とうふとわかめだけだなんて
そんな寂しいこと言うんじゃないよ
めかぶがあってもいいじゃないか
煮すぎると色が悪くなるけどね

鍋が グラグラグラグラ 煮たってるぜ

鍋が グラグラグラグラ 吹きこぼれそうだぜ

味噌汁の具なんてふざけたこと唄ってる
あいつはなんにもわかっちゃいないんだ
なめこのことも忘れないでくれよ
煮すぎると酸っぱくなるけどさ

鍋が グラグラグラグラ 煮たってるぜ

鍋が グラグラグラグラ 吹きこぼれそうだぜ

形がくずれちまっても
鍋の底に沈んじまっても
いつかお前と一緒にになりたい
ひとつになりたい ひとつになりたい

味噌汁はあんまり煮こみすぎるなよ
不味くなるからさ気をつけな
なぜかって？ そりゃあんた決まってるだろ
グルタミン酸が飛んじまうからさ

鍋が グラグラグラグラ 煮たってるぜ

鍋が グラグラグラグラ 吹きこぼれそうだぜ

オレの胸も グラグラグラグラ 煮たってるぜ

胸も グラグラグラグラ 吹きこぼれそうだぜ

夜の夢、夢の夜

ねむれる夜は ひとりベッドのなか あんただけを夢みて
ねむれない夜は きてほしくない
ゆっくり夢もみられないから

窓をあけてみてみよう あんたの街の灯がゆれている
あたしはどこでも飛んでゆくわ
夢のなかなら どこへでも行けるから

ねむれる夜は ひとりベッドのなか あんただけを夢みて

ひとりの夜は お酒でも呑んで 夢ンなか あんたと乾杯
ふたりの夜は なぜだか不安
これが夢じゃないと言いきれないから

窓をあけてみてみよう あんたの街の灯がゆれている
あたしはどこでも飛んでゆくわ
夢のなかなら どこへでも行けるから

ねむれる夜は ひとりベッドのなか あんただけを夢みて

泣きだしたくなるような夜だから ひとりお酒呑んでます
子供の頃の小さな夢は いつまでも残っちゃいないけど
あんたの夢に抱きしめられて
今夜はゆっくり眠りたい このままゆっくり眠りたい

ねむれる夜は ひとりベッドのなか あんただけを夢みて

ノラ猫ジョーンズ

アタシはノラ猫 やさぐれノラ猫
アタシに さわると ヤケドをするよ
あいさつがわりに 一曲うたえば
あんたのハートは 燃えちゃうよ

アタシはノラ猫 気まぐれノラ猫
アタシのやることは 止められっこないのよ
手出し 口出し しょうもんなら
あんたのハートを 引き裂くよ

アタシはノラ猫 やさぐれノラ猫
アタシはノラ猫 気まぐれノラ猫
アタシはノラ猫 アタシはノラ猫

プ〜カプ〜カ

あいつはちょっとばかりいい奴だけれど
ロウるさいのが玉にキズ
体に悪いからタバコはやめなって
うっとーしいことばかり 言うもんだから
腹立ち半分 面白半分
わざと煙を吹っかけてやったのさ
しらけた部屋に煙がただよう
あたしの心もしらけてく
プ〜カプ〜カ プ〜カプ〜カ
タバコの煙が プ〜カプ〜カ

ふたりの部屋を飛びだして
たどりついたのさ港町
へたくそなスウィングロずさみながら
あいつの写真 ながめてた
腹立ち半分 面白半分
やぶってちぎって花吹雪
よどんだ水面にあいつの顔が
こっち向いてニッコリ笑ってらァ
プ〜カプ〜カ プ〜カプ〜カ
あいつの笑顔が プ〜カプ〜カ

ジャズの聴こえる盛り場で
あっちへフラフラ こっちへフラフラ
別の男に愛想ふりまく
あいつのこと思いながら
 腹立ち半分 面白半分
 酔っぱらって つぶれて 傷だらけ
 いなたいリズムが心をきざむ
 切なく夜が更けてゆく
 プ〜カプ〜カ プ〜カプ〜カ
 ラッパが響くよ プ〜カプ〜カ

今のことばかり精一杯で
先のことなんて見えやしないよ
ましてや あいつとあたいの
死ぬときなんて わかりやしないのさ
 腹立ち半分 面白半分
 波止場にゴロンと寝ころがって
 煙草に火をつけ煙を吐いて 見あげりゃそこに青い空
 プ〜カプ〜カ プ〜カプ〜カ
 白い雲が プ〜カプ〜カ

 プ〜カプ〜カ
 青い空に 白い雲が プ〜カプ〜カ

だらしない女となさけない男と都合のいい女

古いカントリーに出てくるような
だらしない女にはなるんじゃないよと
ちっちゃい頃から言われつづけてたのに
今じゃどうだい こんなアリサマさ
アタシみたいになるんじゃないよと
呑んでくれては泣いていた
そんな姿をさんざ見てきたのに
やっぱりアタシもあんたの子どもだったよ
古いカントリーに出てくるような
だらしない女になっちまったよ

古いブルーズに出てくるような
なさけない男には惚れるもんかと
思っていたのに 決めていたのに
今じゃどうだい こんなテイタラク
だらしない女のまわりには
ろくでもない男しか寄ってこないよ
そんなことはわかりきっちゃいるさ
でもしかたないだろ こんな女なんだから
古いブルーズに出てくるような
なさけない男に惚れちまったんだよ

古い演歌に出てくるような
都合のいい女にだけはなるもんかと
これだけは心に誓うよ
安っぽい誓いかもしれないけどさ
街を歩いていても
空を見あげたときも
酒場で呑んだくれてるときだって
心が晴れることなんてないから

古い演歌に出てくるような
都合のいい女にだけはなるもんかよ
だからアタシ
ブルーズもカントリーも演歌だって 大キライさ

化粧ポーチの中には

化粧ポーチの中には夢がある
夢がいっぱいつまってる
化粧ポーチの中には嘘もある
嘘が八百つまってる
あんな嘘 こんな嘘
ひとつずつ塗りつぶして
真っ白けの上に 夢を描く

化粧ポーチの中はのぞかないで
アタシの夢がつまってるんだから
化粧ポーチの中はのぞかないでよ
アタシの嘘を見抜かないで
ファンデーション塗りたくって
なんもかんも塗りつぶして
嘘の上に 夢を描く

あんな夢 こんな夢
ひとつずつ拭きとって
あんな夢 こんな夢
キレイに拭きとって
あんな嘘 こんな嘘 戻ってく
ホントのアタシに戻ってく

化粧ポーチの中には夢がある
化粧ポーチの中には嘘もある

こんな女に似あうもの

星の数ほど男はいるのに
なんであんたなんかと出逢っちゃったんだろう
星の数ほど男はいるのにさ
なんであんたなんかに惚れちゃったんだろう
あばずれ女にゃ やさぐれた男が お似あいつてかい
あばずれ女にゃ 恋の唄なんて唄えないのさ

とっくの昔に女は捨てたって
わざと笑ってカッコつけてるけど
とっくの昔に女は捨てたってさ
ホントは女を捨てきれなくせに
よいどれ女にゃ うらぶれた夜が お似あいつてかい
よいどれ女にゃ 冷たい風は慣れっこさ

男なんて 男なんてさ
田んぼの中に突っ立ってる案山子みたいなもんだろ
男なんてさ 男なんてさ
あんなものために泣いたりしないさ
あばずれ女にゃ やさぐれた男が お似あいつてかい
よいどれ女にゃ うらぶれた夜が お似あいつてかい

ビールをちょうだい、よく冷えたのを

重い脚を引きずり たどりついたのは
ブルースが聴こえる 小さな酒場
カウンターの向こうに 懐かしい笑顔
ねえマスター ずいぶんご無沙汰しちゃったわね

ビールをちょうだい よく冷えたのを
ビールをちょうだい
ああ やっとこれで ひといきつけるわ

この店はあの頃とちっとも変わらないわね
閑古鳥が鳴いてるところも昔のまんまね
そりゃまだ宵の口だからさ あんたが来てるって
知れたら みんなすぐに集まってくるよ

それから ぼつぼつ席が埋まってきた
誰も彼も昔なじみの顔ばかり
おいアバズレ どこかでくたばったと思ってたぜ
なに言ってんだい そいつはこっちのセリフだよ

ビールをちょうだい よく冷えたのを
ビールをちょうだい
ああ やっとこれで ひといきつけるわ

そういや あいつの顔が見えないわね
あたしを騙くらかした あの野郎の顔が
あいつはまだこの町で くすぼってるんだろ？
マスターは寂しそうに首を振った

あんたが出てって いくらも経たないうちに
あいつも ここから消えちまったよ
そうかい それじゃまだどこかの町で唄って呑んで
あたしみたいな女を泣かせてるんだらうね

ビールをちょうだい よく冷えたのを
ビールをちょうだい
ああ やっとこれで ひといきつけるわ

お前さん 今度はいつまでいられるんだい？
いっそ この町でも一度やりなおしたらどうだい
そうだね ふらつき歩くのにも疲れてきたし
ここらで肩の荷おろす潮時かもね

あたしが出てったあとの 話し声が聞こえるよ
あの子はどうせまたどこかへ行っちまうさ
あいつと同じ町には住めなくせに
あいつがいない町にも居つけやしないんだ

ビールをちょうだい よく冷えたのを
ビールをちょうだい
ああ やっとこれで ひといきつけるわ

重い脚を引きずり たどりついたのは
ブルースが聴こえる 小さな酒場
いいことも悪いことも 全部ここで覚えた
ねえマスター ずいぶんご無沙汰しちゃったわね

ビールをちょうだい よく冷えたのを
ビールをちょうだい
ああ やっとこれで ひといきつけるわ

勘違い男の唄

ちよいとあんた なに勘違いしてるんだい
ちよいとあんた なに勘違いしてるんだい

おんながみんな 赤い花束で喜ぶだなんて
そんなこと どこで習ってきたんだい
花より団子 色気より喰い気
花なんか貰ったって 腹の足しになりゃしないんだよ
ましてや お前さんの気持ちだの想いだの
料理する気にもなりゃしないよ

ちよいとあんたなに勘違いしてるんだい
顔あらって出なおしてきなよ

ちよいとあんた なに勘違いしてるんだい
ちよいとあんた なに勘違いしてるんだい

おんながみんな 甘い言葉に喜ぶだなんて
そんなこと 誰に教わってきたんだい
恋だの愛だの 惚れたの はれたの
フッと吹いたら どっか飛んでっちまうような
そんな 歯の浮くようなセリフなんて
おとぎ話の中だけのもんさ

ちよいとあんたなに勘違いしてるんだい
顔あらって出なおしてきなよ

なんなら 頭から冷や水 ぶっかけてあげようか

Hip で Fake な AfterFive

データ入力 コピー取り
電話対応 会議の資料づくり
課長のやらしいセクハラトークも
右から左へサラリと聞き流し
お茶くみながら同僚と
課長の悪口いって気分を晴らすの

お昼やすみはたっぷり取って
3時まわると仕事のフリしてお片づけ
定時ちょうどにタイムカード押せば
あとは自由なあたしの時間
部屋に戻ってシャワーを浴びて
ドレッサーの前で まずは顔を造ります

塗って塗って また塗って
描いて描いてグリグリ描いて
付けて付けて アチコチ付けて
盛って盛って モリモリ盛って
削って 磨いて すかして ぼかして
小悪魔チックにウフフと笑えば
これで男はイチコロよ これで男をだまくらかすのよ

締めて締めてギュッと締めて
集めて集めて お肉を集めて
寄せて上げて 寄せて上げて
ボン・キュッ・ボンをムリヤリ作って
ミニスカ ブーツに 柄タイツ
香水ひとふり シャララと歩けば
これで男はクギツケよ これで男をたぶらかすのよ

あたしだけの道

目の前に伸びるこの道は
とても歩きにくい道だけど
あたしは行くんだ
だって他に道はないんだから

この道は一本道さ
でも先が見えない
行き着く先になにが待っているのか
誰も知らない
だって この道は あたしだけの道だから

冬の嵐のあとに あたたかい光が見えても
あたしにゃ関係 ないわ
あたしはただ歩くだけ
ときには常識ってやつに
泣かされることもあるけど
あたしは行くんだ
だって他に道はないんだから
そう この道は あたしだけの道だから

この道の果てにあるモノを夢みて
この道の果てにあるモノを信じて

オレンジ色の情景

目を閉じると まぶたの裏に
オレンジ色の 情景が浮かぶ
それは 幼いころの思い出か
それとも まだ見ぬ未来の予兆なのか

子供のころに抱いていた
あの大きな夢は いつの間にか
心の中から消え去って
あとに残ったのは大きな穴だけ

こわいものなんか なんにもなかった
いつも明日を 追いかけて キラキラ かがやいていたね

母に手を引かれ歩いたあの道
友と走りまわった あの路地裏
泥んこまみれになっては叱られ
それでも遊びつづけてた あの夕暮れ

今日を一日 かさねるごとに
無意味な言葉が つもっていく
無意味な言葉を おぼえるごとに
他のなにか大切なものがなくなっていく

こわいものなんか なんにもなかった
いつも明日を 追いかけて キラキラ かがやいていたね

目を閉じると まぶたの裏に
オレンジ色の 情景が浮かぶ

夜に想う唄

とても素敵な夢だったよ
でも途中で眼が覚めた
枕元の目覚まし時計は
真夜中を教えてくれる

あの娘の夢を見たんだよ
夢んなかでもやっぱり可愛かったよ
ぼくはずっと あの娘の手を
握りしめていたんだ

Midnight, Midnight Love Song,
この唄を誰のために
Midnight, Midnight Love Song,
この夜を誰のために

雨音におこされた
窓の外は雨 シトシト雨
きみはまだ ベッドの中で
素敵な夢 見てるんだろうな

Midnight, Midnight Love Song,
この唄を誰のために
Midnight, Midnight Love Song,
この夜を誰のために
Midnight, とても素敵で静かな
この夜をきみのために
Midnight, Midnight Love Song,
この唄を誰のために

風動説

草むらに 寝ころんで 夜空を見あげる
ゆっくり星が動いてる
それとも動いてるのは地面の方かな
風が髪をゆらす 風が身体をつつむ
たしかに動いてるって わかるんだ
風は自由自在さ

草や木が ゆれてる なにかを唄ってるかのように
ゆっくり空が動いてる
それとも動いてるのは ぼくの気持ちなのかな
風がほほをなでる 風がぼくらをつつむ
目には見えないけど 感じるんだ
風は自由自在さ

天動説も地動説も ぼくらから見れば おなじようなもの
ゆっくり ゆっくり 動いてる
きっと 動かしてるのは 風なんだろう
ぼくは唄を唄う 風はぼくらをはこぶ
心のなかで なにかがふるえてる
風は自由自在さ

そして

ぼくらも自由自在さ

ピクニック

今度の日曜 いい天気だったら
ピクニックにいこうって あの人が言うの
バスケットにお弁当いっぱい詰めて
買ったばかりの水着も こっそり持っていくわ
あなたの車の助手席にすわって
一緒にいくのよ 湖のほとり
あなたと一緒になら 怖くない怖くない
あなたと一緒にだから 怖くない

アメリカさんを支援するから
戦争に行きなさいって おクニが言うの
バッグに爆弾いっぱい詰めて
ライフル銃なんか肩からカッコよくかついでね
みんなと輸送機に乗せられて
一緒にいくのよ 戦場の真っ只中
みんなと一緒になら 怖くない怖くない
みんなと一緒にだから 怖くない

引きがね引くだけで人が殺せるの
ボタンひとつで人が殺せるの
ひとりでも 十人でも 百人 千人 一万人
どれだけ殺しても罪にはならないの
ホントはね 人を殺すのなんてイヤだけど
しかたないわよね おクニのためだもの
おクニがついてるから 怖くない怖くない
アメリカさんも一緒だから 怖くない

戦争が終わったら のんびり暮らすの
そこにはあなたもいるかしら？
戦争が終わったら のんびり暮らすの
そこにはあなたもいるといいな
たまには遊びに来てよね ピクニックがてら
アタシがいるのはどこかの精神病院？
それともヤスクニ？
あなたと一緒になら 怖くない怖くない
みんなと一緒にだから 怖くない
おクニがついてるから 怖くない怖くない
アメリカさんも (たぶん) 一緒だから 怖くない

ホコリ

このクニで産まれたことに 誇りをもちたいのだが
このクニのえらいさんは そんなもの持つなと おっしゃる
このクニで育ったことを 誇りに思いたいのだが
このクニのえらいさんは そんなこと考えるなと おっしゃる
誇りを持つなとクニは言う ホコリにまみれたクニが言う

このクニで生きていくことに 誇りをもちたいのだが
このクニのえらいさんは そんなもの持つなと おっしゃる
このクニを信じることを 誇りに思いたいのだが
このクニのえらいさんは そんなこと考えるなと おっしゃる
誇りを持つなとクニは言う ホコリまみれのクニが言う

このクニで学んだことに 誇りをもちたいのだが
このクニのえらいさんは そんなもの持つなと おっしゃる
このクニで働くことを 誇りに思いたいのだが
このクニのえらいさんは そんなこと考えるなと おっしゃる
誇りを持つなとクニは言う ホコリにまみれたクニが言う

このクニで死にゆくことに 誇りをもちたいのだが
このクニのえらいさんは
そんなもの持たなくていいと おっしゃる
このクニを愛することを 誇りに思いたいのだが
このクニのえらいさんは
そんなこと思わなくていいと おっしゃる
誇りを持つなとクニは言う ホコリまみれのクニが言う
誇りを持つなとクニが言う 誇りをもちたいオレに言う
誇りを持たないヤツが言う 誇りを捨てたクニが言う

ぼくらが生まれた星

緑でおおわれた星だった
海はどこまでも透きとおり 空は青く ひろびろと
雲はポッカリ風に乗る 夕陽は沈む 波の向こうに

何億年も生きてきた 宇宙の歴史の片隅で
過去から未来ながれるままに ぼくらのいまを見守りながら
来る日も来る日も生きてきた 無限にひろがる 宇宙の中で

ぼくらが生まれた星だから
緑の森と暮らしたいから 野に咲く花と遊びたいから
新しい明日を迎えるために 美しい明日を迎えるために

これからも生きてゆく 地球の歴史の片隅で
過去から未来ながれるままに ぼくらのいまを刻みながら
来る日も来る日も生きてゆく 母なる地球の 大地の上で

来る日も来る日も生きてゆく ぼくらが生まれたこの星で

暮らし

目覚まし時計に おこされる
おきたかないけど おきねばならぬ
満員電車の けだるさを
かかえて職場にたどりつく
 汗水たらして うみだすモノが
 いかなる値打ちを持っているのか
 わからぬままに 今日もまた
 あれよあれよと暮れてゆく
部屋に帰って ひといきついて
野球の結果に 喜んだり顔をしかめたり
こうして毎日 過ぎていく 明日もけだるい朝が来る

タイムカードに刻まれる
数字の羅列が踊っている
これが毎日の 生きている
証しになるのか ならぬのか
 社会の歯車なんかにゃなりたかないと
 わけもわからずに突っ張っていた
 歯車にさえなれないことに気づいてからは
 からだも心も 楽になったよ
うまいもん食べて お酒に酔って
あなたのギターにあわせて唄う
こんな週末 いつもの夜 いまが楽しけりゃ それでいい

うまいもん食べて お酒に酔って
あなたのギターにあわせて唄う
こんな週末 いつもの夜 いまが楽しけりゃ それでいい

こんな週末 いつもの夜
いまが楽しけりゃ いいんじゃないの

みやこちゃんの好きな人ってどんな人？

みやこちゃんの好きな人って どんな人？

あのね あたしの好きな人はね
あたしのことを好きでいてくれる
そんな人が 好きなのよ
全部じゃなくても かまわない
ほんの少しだけで いいからさ
あたしのことを わかってくれる
そんな人が 好きなのよ
あたしのやることなすことを
だまって笑って見てくれる
そんな人が 好きなのよ
そんなあなたが 好きなのよ

みやこちゃんの好きな唄って どんな唄？

あのね あたしの好きな唄はね
あなたの暮らしが見えてくる
そんな唄が 好きなのよ
かっこつけただけの言葉じゃなくて
ありふれた言葉でいいからさ
あなたの心が 見えてくる
そんな唄が 好きなのよ
あなたの唄を聴きながら
からだ揺らして踊りたい
そんな唄が 好きなのよ
そんな唄に 酔いたいよ

みやこちゃんの好きな場所って どんな場所？

あのね あたしの好きな場所はね
好きな人がいて 好きな唄がある
そんな場所が 好きなのよ
だから あたしは ここにいる